

初代刈谷藩主 水野勝成

おにひゆうが
鬼日向のいくさとまちづくり

戦国時代、武勇で腕を鳴らした武將は数多くいますが、江戸時代に入ると活躍の場を失い、武力のみでは生き残れなくなります。

しかし、初代刈谷藩主の水野勝成は違います。勝成は藩主として内政においても優れた手腕を発揮しました。ここでは戦国から江戸時代という大きな時代の変化の中で活躍した水野勝成の生涯を紹介します。

閏 歴史博物館(☎63・6100)



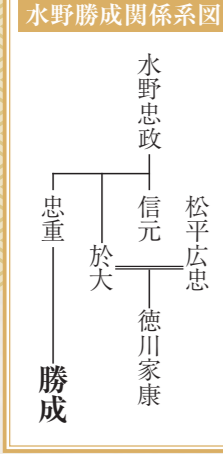
水野勝成画像(福山市賢忠寺蔵)

●戦国時代、刈谷を治めていたのは…

戦国時代は「下剋上」という言葉があるように、各地の豪族が自分の勢力の拡大のために戦いに明け暮れた時代でした。知多半島を勢力圏としていた水野氏は、衣ヶ浦を挟んで対岸の刈谷にも進出を始めます。天文2年(1533)の水野忠政による刈谷城築城後、刈谷は水野氏によって支配されますが、西の尾張には織田氏、東の岡崎は今川義元の支配下にあった松平氏(後の徳川)に挟まれ、いつ戦乱がおきてもおかしくない状況でした。永禄3年(1560)の桶狭間の戦いのあと、当時の刈谷城主・水野信元の仲介により織田信長と徳川家康が同盟を結んだことにより、この地域では戦乱の脅威はなくなります。そのような中、忠政の孫である勝成は永禄7年に生まれます。

●戦国の世を駆け抜けた青年期

勝成の初陣は天正7年(1579)におこった高天神城の戦いです。高天神城



(現在の静岡県中央部)は、当時、武田勝頼が支配していましたが、徳川家康が攻め込みました。勝成と父・忠重は織田信長の命によってこの戦いに参加し、家康が勝利を収めています。

その翌年、本能寺の変によって信長が亡くなると、羽柴秀吉が後継者に躍り出て、天正12年には家康との間で小牧・長久手の戦いがおこり、忠重と勝成は家康側で参戦しました。その時、勝成は目の上に腫物ができたため兜を被らずに参戦し、心配する父の制止を振り切って大活躍したといわれています。

その後、秀吉と家康との間で和睦が成立し、豊臣秀吉は天下統一を進めていきました。この頃、勝成は父・忠重の怒りを買って勘当され、歴史の表舞台からは姿を消します。勝成自身が記した「覚書」によると、中国地方から九州地方にかけて、秀吉家臣の大名の下で数々の戦いに参加していたことが書かれています。天正17年、肥後国(現在の熊本県)でキリシタン大名の小西行長に仕えた際には、天草五人衆と呼ばれる豪族の反乱を抑えるため、天草へ出陣、志岐城・本渡城といった天草の城を制圧しています。

慶長3年(1598)秀吉が伏見城で亡くなり、さらに翌年には重臣・前田利家も亡くなったことで、家康派と反家康派との争いは避けられなくなりました。

この頃の勝成は家康の身辺警護にあたり、いたとされ、家康の後押しもあって父・忠重との対面・和解が成立しました。そして慶長5年、関ヶ原の戦いの直前に忠重が池鯉鮒(現在の知立市)で殺害されたため、勝成が跡を継ぐこととなります。

●刈谷藩主を務めた壮年時代

天下分け目と言われる関ヶ原の戦いで、勝成はその前哨戦にあたる大垣城攻めに参戦し活躍しました。この戦いで家康が勝利を収めると、勝成はその恩賞として京都の朝廷から「従五位下日向守」という称号を与えられます。なお、勝成の異名である「鬼日向」はここに由来しています。

慶長8年(1603)、家康が征夷大将軍となって江戸時代が始まると、勝成は初代刈谷藩主として刈谷城の修復や城下町の整備などを行ったと考えられます。

全国に目を向けると、応仁の乱(1467)以来100年以上戦国時代が続き、秀吉による天下統一後も朝鮮半島への出兵が行われるなど、戦乱が止むことはありませんでしたが、関ヶ原の戦いから大坂の陣まで14年の間は、国内で大きな戦乱は発生していません。当時の日本人にとって戦いの無い平和な時代というのは、とてつもなく大きな変化だったと考えられます。

水野勝成 関連年表

- 永禄7(1564)年 勝成生まれる
- 天正7(1579)年 高天神城攻めに参戦(勝成の初陣)
- 天正10(1582)年 本能寺の変により信長死去
- 天正12(1584)年 長久手の戦いで活躍するも、父忠重から勘当される
- 豊臣秀吉に仕えた後、九州や中国地方を放浪する
- 天正18(1590)年 豊臣秀吉による小田原城攻め(天下統一)
- 慶長4(1599)年 家康の仲介で忠重と和解する
- 慶長5(1600)年 父・忠重が殺害され、刈谷3万石を継承
- 関ヶ原の戦いでは大垣城を落とす
- 慶長8(1603)年 徳川家康が征夷大将軍となる
- 慶長19(1614)年 大坂冬の陣に参戦
- 元和元(1615)年 大坂夏の陣に参戦し、小松山の戦いで後藤又兵衛らを破る
- 大和国郡山6万石に転封
- 元和5(1619)年 備後国10万石に転封
- 元和8(1622)年 福山城築城。城下町を整備し、産業を奨励する
- 寛永15(1638)年 島原の乱に子孫と三代で出陣する
- 慶安4(1651)年 勝成死去

刈谷藩主

3月24日(日) 刈谷市歴史博物館が開館します

刈谷の歴史に親しみ、興味を持って学ぶことのできる博物館です。刈谷の歴史をテーマにした常設展示室「歴史ひろば」や、刈谷の祭りを体験できる祭り展示室「お祭りひろば」の他、歴史上の人物や貴重な遺跡などを取り上げた魅力ある企画展を開催します。
開館日には盛りだくさんのイベントを開催。皆様のご来館をお待ちしています。



☎ 歴史博物館 (☎63-6100)

開館時間 9時～17時

(※月曜(月曜が祝日の場合は翌日)、祝日の場合は翌日、年末年始)

※24日(日)は10時30分開館、25日(月)は臨時開館

※施設情報、開館イベントの詳細は市民だより3月1日号で特集します。

場 逢妻町4-25-1



アクセス方法
公共施設連絡バス「体育館」下車



歴史博物館のHPができたカーリー！
歴史博物館開館記念イベント、企画展や歴史文化に関する情報を紹介しています。市HPよりアクセスしてください。

●大坂夏の陣での活躍

慶長19年(1614)におこった大坂夏の陣は、徳川家が豊臣家を滅亡に追い込む戦いでした。しかし、秀吉の築いた大坂城は難攻不落だったため、一旦和睦を結び、周辺の堀を埋めます。そこで豊臣家は大坂城を出て戦うこととなり、慶長20年4月、大坂夏の陣がおこります。ここで勝成は総大将として伊達政宗と共に奈良方面から進軍し、小松山(現在の大阪府柏原市)で豊臣方の重臣、後藤又兵衛らと激戦となります。ここで又兵衛を討ち取るなど大きな戦果を挙げたことで大坂夏の陣の大勢は決し、後に大坂城は落城、豊臣家は滅亡しました。

この功績により翌元和2年(1616)、勝成は刈谷から大和郡山(現在の奈良県大和郡山市)6万石へ転封します。当時の大和郡山は交通の要衝でしたが、大坂の陣によって荒廃してしまっていました。勝成は、ここでも復興に向けて大きな役割を果たしたと思われる。

●福山を創り上げた殿様

元和5年(1619)、勝成はわずか3年で備後国(現在の広島県東部)福山10万石へ転封となります。当時の備後国は西の安芸国に浅野家、東の備中国に池田家という外様の大名が控え、それらの監視役であったともいわれています。勝成は最初、山側の神辺という所に居を構えますが、城の建設にふさわしい場所



▲福山城天守閣 (現在は福山城博物館となっている)

を求め領内をくまなく巡見します。その結果、芦田川流域の小高い山、のちに福山城となる場所を見つけました。江戸時代、新たに城を築くことは幕府

によって禁止されていましたが、福山城に関しては幕府から特別に許可が与えられました。城だけでなく芦田川流域の干拓を進めて城下町も整備し、上水道を建

コラム 島原の地で繋がる 刈谷の藩主

平成30年6月、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がユネスコの世界文化遺産に登録されました。キリシタンの歴史を語る上で欠くことができない島原・天草一揆(島原の乱)は、刈谷と不思議な縁でつながっています。

まず、水野勝成がこの戦いへ出陣しています。そして、勝成へ出陣の命令を下したのは当時の幕府首脳であった土井利勝です。刈谷藩は後に土井家が藩主となり幕末を迎えますが、その藩祖が土井利勝になります。

この他、島原・天草一揆の総大将として戦死した板倉重昌の子孫は、後に野田・小垣江などを治める重原藩主として、明治に入ってからの一時期、重原地区に移り住んでいます。

このように刈谷藩主の水野家、土井家、そして重原藩主の板倉家が島原でつながっていることは、刈谷の歴史が紡いだ不思議な縁と言えるかもしれません。

●戦国の生き字引として再び九州へ

寛永14年(1637)、島原において庄政とキリシタン弾圧に反発した領民が一揆をおこし、原城(現在の長崎県南島原市)に立てこもります。この島原・天草一揆(島原の乱)では、はじめ幕府から板倉重昌が派遣され、抑えられるものと考えられていました。しかし一揆勢は抵抗を続け、総攻撃に失敗した重昌は戦死しています。そのため、九州からは遠く離れた福山藩主の勝成にも出陣の命令が下されま

設するなど、多くの人が集まるようになりました。さらに産業として、この地域の名産である豊の原料・蘭草の栽培をはじめ、綿の栽培などを奨励しました。このように福山の発展は勝成なくして語れませんが、勝成のまちづくり・城づくりの能力は、おそらく刈谷藩主としての経験が生かされていると思われる。

●水野勝成の人物像

島原・天草一揆が終わった翌年、勝成は隠居しますが、その後も武芸の鍛錬を怠ることはありませんでした。88歳の年に鉄砲で撃つたとされるのが現在も残されており、戦国武将としての生き様を垣間見ることが出来ます。水野勝成は、戦国から江戸へとという時代の流れの中で、「武将」と「藩主」という画面において優れた能力を発揮し、平和な時代を創りあげました。

時に勝成75歳、大坂夏の陣から23年ぶりの戦いで、九州以外の大名としては唯一の参戦。関ヶ原の戦いで降に生まれ、実戦経験のない武将がほとんどの中、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の「三英傑」のもと共に戦った者として、幕府からの特命でした。

開館記念企画展

初代刈谷藩主 水野勝成展

～「鬼日向」のいくさとまちづくり～

時 3月24日(日)～5月19日(日)

刈谷藩初代藩主である水野勝成の武勇を伝える資料を中心に、平和な時代を創り上げるために勝成が果たした役割を紹介し、また藩主として刈谷の発展に尽くしたことは、福山(広島県)の城下町の開発を主導した実績からも想像することができます。

今回の企画展では、武勇のみではなく内政にも優れた手腕を発揮した水野勝成の人物像を明らかにします。

▲裏永楽銭紋黒熊毛二枚胴具足 (福山市賢忠寺蔵)

▲水野勝成八八歳時銃撃的 (個人蔵 茨城県立歴史館保管)

▲金箔押長烏帽子形変わり兜 (福山城博物館蔵)

背景:福山左義長絵巻(福山城博物館蔵)